

## 三十有余年の小樽商大教員生活を顧みて

田 野 有 一

“北に一星あり，小なれどその輝光強し”と謳われる名門校の「小樽商科大学」に奉職できたことは自分自身にとってこの上ない喜びであり，今後の生活においても“大なる誇り”です。一言で表するならば，これまでの31年半（昭和53年10月1日～平成22年3月31日）におよぶ小樽商大での教員生活は，本当に幸福感に満たされた日々でした。

振り返ってみますと，33歳という若さで本学に赴任した日のことは今でも鮮明に覚えております。赴任の挨拶を求められた初の教授会の席上で，思いもよらぬ事態に出っくわし，その日を境に私の小樽商大教員生活が始まりました。それはヘルメットとタオルとサングラスで頭部・顔を覆い隠し，角棒を手にした多勢の学生達が傾れ込み，大声で自分達の言い分のみを主張する場面でした。それまでの商大事情をよく知らない自分にとっては何と表現してよいやら，予想に反した商大初日（スタート）でした。あの日の事は忘れることができません。

前任地・前任校とは生活環境が全く異なり，先ずは気持ちの切り替えが求められました。「平地から坂の街へ」，「氷の街から雪の街へ」，「スケートの街からスキーの街へ」，「内陸の街から海の街へ」，そして教育の対象者が「女子から男子へ」，教育カリキュラムが「学科（短大）から学部（四大）へ」……といういわば（自分自身にとっての）大変化は，本当に意を決して事に臨まねば……と強く感じたのを覚えています。その緊張度は大変なものでした。

そのような緊張度も杉山登先生と藤江正先生（両氏ともに小樽商科大学名誉教授）による懇切丁寧な御指導と御鞭撻により徐々に解消でき，また授業への対応にも慣れることができました。今にして思えば，今日まで無事に勤め上げることができたのも，両先生の教えがあったればこそ……と心底から

感じている次第です。本紙面をお借りし深甚の感謝を申し上げたいと思います。

「教育と研究」が大学教員としての使命であることは言うまでもないことです。私の場合、その専門分野がスポーツの「指導方法」ですので、これらの研究成果を基に実践場面において実際に生かすことができれば何の意味もなさないわけです。まさに“フィールド・ワーク”が大変重要であり、大切な分野であると常々考えています。机上の空論では決して実践場面に役立ちません。

かかる意味において、(赴任当初は)自分が奉職する小樽商科大学での在任中に、いったいどんなことが成しえるか、小樽商大生に何が伝えることができるか……といういわば自分自身にとっての命題設定に正直悩みました。実技面における私の専門種目は「体操競技とトランポリン競技」ですので、できることならこれらの面で何らかの成果を示すことができないか……と真剣に考えたものです。そうした末に一大決意し、(現在の)「トランポリン競技部」を立ち上げ、研究テーマもこれらに関することに焦点を当て、研究を進めてきました。

この間、大学の内外事情も幾多の変遷をみせ大きく様変わりしてきました。我が小樽商科大学においても同様に、学部・大学院の改組・改革が積極的に進められてきました。その度にカリキュラムの再編を余儀なくされた履修対応(経過措置)に、時には混乱をまねくことさえありました。そうしたことも今では懐かしい思い出の一コマです。

こうした傍らで、小樽商科大学の体育・スポーツ施設も徐々に充実度を増し、屋内(温水)プールの改築、体育館事務室の拡張、第2体育館・トレーニングルームの新設、第1体育館;床面の改修、スキー庫・ゼミ室の改修などが進められてきました。そして長年の悲願であった「第1体育館の大改築」が遂に実現し、2006(平18)年春に挙行された落成記念時での式典・テープカットは私にとっては生涯忘れられない出来事となりました。

健康科学講座の運営面では、3名の専任教員(花輪啓一・中川喜直・石崎

香理の3先生)に大変に御世話・御尽力を頂きながら今日を迎えることができました。また、これまでの31年半の間、多くの良き非常勤講師に恵まれ、円滑な授業を展開する上で多大なる御貢献を賜りました。さらには、健康科学科目の特性上、学務課(旧学生課)教務係や学生支援係(旧課外活動係)の職員各位には一方ならぬ御支援・御協力を賜りました。改めて心より厚く感謝を申し上げます。

今、こうして何とか本務を終え退職できるのも、実に多くの方々による御力添えのお蔭……と感じている次第です。長年の間、本当に御世話になりました。誠に有難うございました。

そして、(やはり自ら立ち上げた)小樽商科大学「トランポリン競技部」に関して、今一つ記しておくことを御容赦願いたいと思います。平成20年4月より丸2年間、小樽商科大学特任教授として奉職させていただきながら、(引き続き)この部活の顧問・監督としての任を務めて参りました。この間にも(連続)2度の「学生表彰」を授与されるという慶事に恵まれ、本表彰も通算6度目ということに相成りました。これまでの30有余年、良き部員達に恵まれ、まさに“喜怒哀楽”の日々を送ってきました。この間、一貫して部員達に言い続けてきたことは、トランポリン競技を通して“競技の奥深さと人間向上に努めよ”ということでした。入部した殆どの者が初体験といういわば宿命的な負い目を如何にして克服できるかを最大テーマとし、常に真摯な態度で練習に臨むことの大切さを伝授してきたような気がします。この部を単立っていった卒業生諸君には、おそらく「厳しい監督; 田野有一」として記憶されているに違いないと思います。そのような彼らが自ら立ち上げた「緑翔会」(卒部生OB・OG会)構成員数も今や百有余名を数え、現役部員を物心両面で支えてくれていることに無上の喜びを感じております。そして、私は(つくづく)“創る苦労よりも発展させることの難しさ”を痛感しているこの頃です。また、今夏に開催された「第45回全日本学生選手権大会」(H22.8.27~29、於・金沢市)において、本学としては初の「男子; Aクラス」(最高クラス; 出場者の殆どが幼少期からの経験者で構成されているのが現

状)への団体出場を果たし、見事、第3位の快挙を収めることができました。監督としてもこれまでに味わったことのない感動に胸が震えました。何事も継続が大事……と申しますが、ここに至るまでには実に30年の歳月を要したわけです。(前記した)藤江正先生のお言葉「事を成すには決して焦ってはいけない。何事も最短10年はかかるものだよ」の真意を痛感した次第です。

本稿の終えるにあたり、本当に長年に亘り御指導・御鞭撻を賜りました小樽商科大学の教職員各位に対しまして衷心より厚く御礼を申し上げます。さらに、私自身にとりましては身に余る「名誉教授」の称号を授与させていただいたことに対しましても、深甚の感謝を申し上げたいと存じます。

来年度「創立100周年」を迎える我が小樽商科大学の今後さらなる御発展を心より御祈念申し上げ、退職に当たっての御挨拶とさせていただきます。

(H 22.9.15 記)